

大平正芳先生の思い出

上村千一郎

私は、大平正芳先生が主宰をされていた宏池会には参加しておりませんが、大平先生の人間性と、信義の厚いお人柄については、かなり前からうかがっていました。といいますのは、私の遠縁にあたる増田健次さん（元野村證券副社長）が、大平先生とは旧制高松高商も一橋大学も一緒の仲であり、ご家族ぐるみのおつきあいをされておられましたので、増田さんから飾り気のない大平先生のお人柄を聞くことが多くありました。

先生は、ことに、友人仲間から最も信頼の厚かった人であり、決して嘘をいわない誠実な人であることを、幾度となくお聞きしていました。

ある時、私と増田さんが遠縁にあたることを大平先生に申し上げると、「増田君は学校の成績がすばらしかったよ」と、温かい笑みを浮かべて懐かしげにいわれたお声には、ほのぼのとした友情のぬくもりを感じました。

大平先生の『私の履歴書』のなかに、次のようなことが書かれています。大蔵省初登庁の日の昼、同期生は食事を共にした。その時、私は「お互いにこれから、中国式に悪口をいわずほめ合うことにしよう。そのうちはこの中のだれかが偉くなる（例えば満鉄総裁）。そうすると、お互いに食客になることもできようものだ」といったことを覚えている。事実その後、われわれはまことに仲よくつき合っている。

私は、このお話を大平先生から直接うかがったことがある。その節、先生は「いい出した私が、今では頼られる立場になったよ」といって笑っておられた。

第一次大平内閣の発足にあたって、私も入閣することになった。私は環境庁長官を命ぜられた。文字通り、人生意気に感じ、粉骨碎身の思いで努力した。

大平先生は田園都市国家構想をうち出されました。それは、地域の個性を生かし、みずみずしい住民生活を築こうとするものであり、先生の温かい人間性に、深く根ざしたものです。

田園都市国家構想は、私も平素から郷土の人々に語っておりました。環境行政はその一翼を担うものと考え、私は大平先生のご指導のもと全力を傾注しました。私の生涯にとつて貴重な一年となったのです。

五十四年の春、新宿御苑で観桜会が開かれました。この日はまれにみる好天気でした。大平総理から多数の方が招待されて、盛会裡に終了した後、大平総理ご夫妻が、田中官房長官ご夫妻と私も夫妻と食事をとともにされました。「上村君は、いわば家主さんだから」といわれた。環境庁が新宿御苑を所管する関係から、ご相伴にあずかったのです。たまたま私の先輩で、環境庁長官をつとめられたこともある大石武一先生ご夫妻も席をとりにされて、和やかな談笑の一刻を過ぎた時のことでした。

大平先生の最初の選挙の時に、応援にこられた吉田茂総理が、「大ダイラ君」と二回も間違つて呼ばれた話はいさばお聞きしていたが、この席でも選挙の話が出ました時に、大平先生は志げ子夫人に「俺を落とさんでくれよ」と真顔でいわれたので、みんな大笑いをしました。もちろん軽いウィットでしたが、その口調のなかに志げ子夫人への温かい情愛がにじんでいるのを感じました。

私は昭和五十年、大蔵常任委員長をつとめたことがあり、当時大平先生は大蔵大臣でした。例の財政特例法を成立させた頃の思い出もあります。人には終生忘れ得ない思い出があるものです。私の大平先生に対する思い出の一齣は、このようなものです。

(衆議院議員・第一次大平内閣環境庁長官)